

川や海、森や湖に触れる機会が多い釣り人は、
動植物たちの次に、環境の変化に
敏感でいられる存在なのかもしれない。
だからこそ、できること、
やらなければならないことがある……



第2回
日本を代表する
スプリングクリーク

西別川再生をめざす人々たち



Nishibetsu-River

バイカモが揺らめき、限りなく透きとおった清冽な流れ……。
西別川といえば、多くの人がそんな情景を思い浮かべるのではないだろうか？
しかしその表情は、この川の一面に過ぎない。
下流に向かうにつれ、その流れは濁りを増し、中下流域にかつての面影はない。
そんな中、流域の住民たちの中で、「清らかな流れを取り戻そう!」という取り組みが始まっている。

写真・文〇滝川康治 (ルポライター・下川町在住)



たくさんの恵みを与えてくれた西別川の様子を話す大橋さん夫婦

夫婦のお宅を訪れて、話を聞いた。
「子供の頃、先生が連れていくのが西別川で、喉が渇くとみんながガブガブ飲んだし、浅瀬にはカラス貝やヤマベがいましたね。ナラの太木を倒して父親が作った丸木橋の下には、イトウやホッチャレが遊んでいたんですよ」
中流部の西春別地区の農家で生まれ育ったヒサ子さんが述懐する。子守をしながら山菜やキノコを採る。父母たちは冬になると馬そりで西別川の砂利を運び、それで牛舎やサイロを造る。多くの恵みを与えてくれたのが西別川だった。
「河口の近くに中洲があって、ヤナギの大木で鬱蒼としていた。浅瀬にサケやマスが遡ってきて暴れるんだけど、それを子どもたちが捕まえていたね」
戦後、国後島から引き揚げてきた吉太郎さんが話す。当時の河口部のようすである。根釧パイロットファーム事業（56年入植開始）、新酪農村事業（73年着工）

摩 周湖の麓に端を築き、根釧台地の広大な酪農地帯を蛇行しながら根室湾に注ぐ流長77kmの西別川。その語源は、アイヌ語の「ヌ・ウシ・ベツ（温泉・ある・川）」といわれ、標茶町虹別にある水産庁の孵化場付近で噴出する湧き水に由来するらしい。
孵化場に近い西別川の源流部は、水生昆虫の成育に適したバイカモが川面に揺れる。大雨が降って下流部が茶色く濁っても、森に囲まれたこの辺りは清流そのものである。釣り人の姿も多い。
上流部は清流を誇る西別川も、別海町に入る辺りから汚れを増す。草地開発が進んで土砂が入りやすくなり、酪農の大規模化で牛の糞尿問題も起きているためである。
別海町の浜別海地区で、漁業の傍ら棚漬けと呼ばれる独特の方法で塩ザケを作って直販する大橋吉太郎さん（59）と、漁協婦人が取り組む「お魚殖やす植樹運動」のリーダー格のヒサ子さん（57）

かつての清流を取り戻したい…

西別川水系 がわ

進んで 悪化する 河川環境

と続いた酪農の規模拡大路線によって、西別川はかつての清流を失った。だから、「パイロットファームの時代までの西別川に戻して、みんなで考えよう」と、吉太郎さんはこれまでずっと主張してきた。

ヒサ子さんから婦人部員が火付け役になつた植樹運動は、町ぐるみの取り組みに発展している。酪農の拡大に伴う川の汚れを反省する機運も高まりつつある。しかし、清流を取り戻すまでには、まだまだ長い時間がかかりそうである。

サケ科の魚の生態に詳しい小宮山英重さん(標津サーモン科学館主任学芸員)は今年4月、3日間かけて西別川支流のシカルナイ川(保護河川)の源流部から本流までを調査した。が、小宮山さんが目視できたのはニジマスとアママスだけで、惨たんたる状況だった。ちなみに、オネネベツ川との合流点から下流の西別川水系は、清丸別川など二部を除いて保護河川に指定されている。

「ほかの保護河川なら魚の姿が見えるの

に、「たまに見えるかな」という感じでした。これほど魚影の薄い保護河川は見ることがありません(小宮山さん)

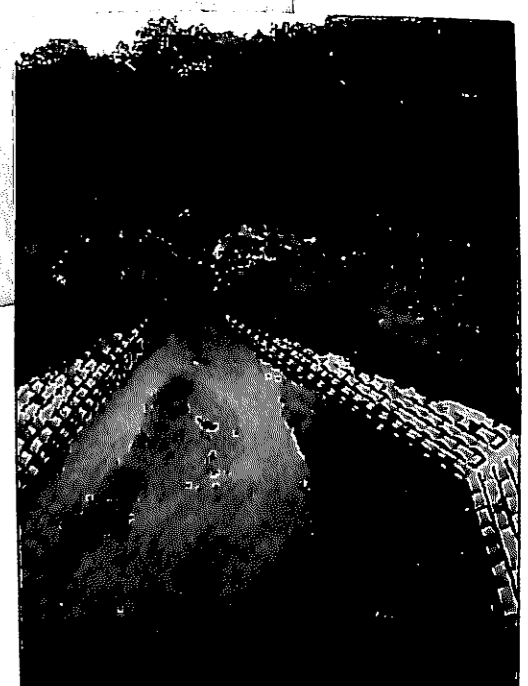
シカルナイ川の源流付近には、川真珠貝(通称・カラス貝)がほとんどおらず、かろうじて湧き水のまわりにだけ生息していた。ある場所から下流になると現われるが、大きさが均質で小さな貝はなかった。

小宮山さんによると、これは、幼生のときにヤマメやニジマスのエラに寄生しないと生存できない、川真珠貝の生態と関係がある、という。つまり、昔は源流部付近にも生息していたサクラマスが絶滅した可能性が高く、成長した川真珠貝だけが生息している訳である。

「30年ほど前にはオネネベツ川や虹別付近にニホンザリガサがいた、と聞くが、今は全流域で姿が見えない。イトウの目撃情報を聞いて産卵床を捜してみなければ



各地の川を歩いてサケ科の魚の生態を調べている小宮山さん



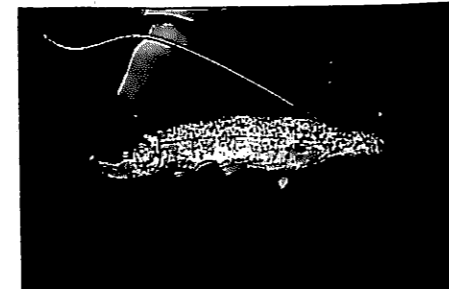
草地化と河畔林の伐採、コンクリート護岸によって土砂がたまった西別川の支流(別海町宮牧場内)

地元の人によると、このあたりは昭和40年代には近寄るのも怖いくらい鬱蒼とした森で、ワラビ採りの穴場だったらしい。今は広大な牧場となり、ここ1、2年の間に道路工事や河川改修が行なわれたところもある。河畔林を伐り倒し、コンクリート3面張りの護岸を築いて立派な橋を架ける。事業主体は根室支庁という。土砂の流入もひどい。西別川沿いに植樹をしながら、支流では旧態依然の工事、なんともチグハグな光景だ。

西別川流域では、この40数年間、多額の予算を投じて農政主導型の大型酪農郷づくりが進められた。別海町は乳牛の飼育頭数、草地面積とも日本一の規模に達している。そうした拡大路線の末に、多くの酪農家は多額の負債や糞尿問題などを抱え、もう一方では自然環境の悪化が進んでしまった。

少し古い数字になるが、漁業団体の水

質調査結果(93年の数値)によると、根室管内では糞尿や化学肥料などに起因する硝酸態窒素濃度のワースト5は、西別川をトップに床丹川、茶志骨川、春別川、当幌川の順。硝酸態窒素や糞尿の大量菌群は、管内にあるサケ・マス増殖河川の支流や源流部からも検出されている。この夏には、別海町内の水産加工会社のイクラ製品による0.157汚染が発生した。酪農地帯の真ん中で起きた事件だけに、気掛かりな話である。



西別川のニジマス。最近では小型化が進み、大型の個体は少なくなっている

流域で広がる 再生にむけた 試み

源流部を除けば、西別川の自然環境は「瀕死の重傷」といったところだが、ここ数年、かつての清流を取り戻そうとする活動が盛んになってきた。

10年前、漁協婦人部の人たちが西別川や床丹川の近くで始めた植樹運動に触発される形で、別海町は94年から「魚を育てる森づくり事業」に取り組んでいる。西別川の両岸50mに、ニレやハンノキ、ヤチダモ、ミズナラなどの広葉樹を中心に、

苗木を植えて河畔林を再生させる試みだ。10年間で103ヘクタールが目標で、この5年間に55ヘクタールほどの植樹を終えた。

離農跡地を町が買い取り、上流から中流に向かって毎年2〜5万本ずつ植えてきた。毎年6月に植樹祭を開いていて、今年は農漁業や建設業団体、釣り愛好グループなどから160人が参加した。会場の一角は漁協婦人部の「お魚殖やす植樹運動」のために提供される。

「町が取り組むようになって、すごくうれしかったし、農家の人と一緒に植えた時には涙が出ました。数は微々たるものだけれど、(森をつくる)意識としての広がりがあるんです」

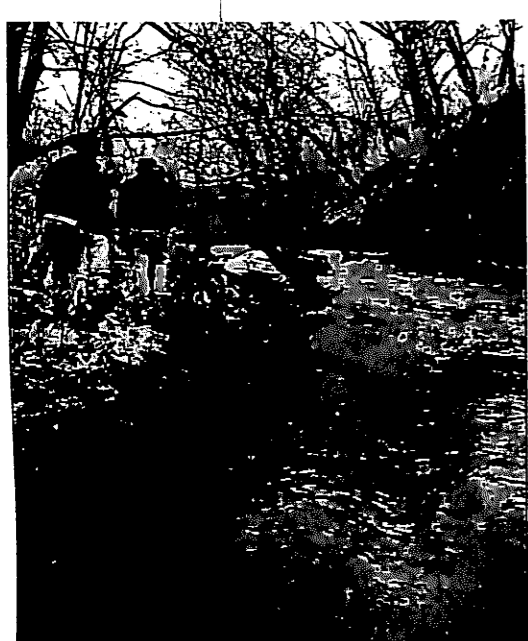
そう話すのは、植樹のきっかけをつかった大橋ヒサ子さんである。

町農林課では、「いろんな団体が興味をもってきて、植樹祭の参加希望者は増えている」と言いつつ、下流に行くにしたがって用地確保が難しくなる、と悩ん

ど、見つからなかった。西別川が保護水面として機能しているかどうか、洗いなおす必要がある」

長年の調査をもとに、小宮山さんは指摘する。

魚や貝が棲みづらくなつたのは、草地開発や河畔林の伐採、糞尿の流入、河川工事などが互いに関連している。それを象徴する場所が、シカルナイ川流域の別海町宮成牧場の中にあつた。



クレソンやバイカモが茂る早春の西別川上流部

でいた。これからは植樹活動の真価が問われるところだろう。

アイヌの人たちが「コタン・コロ・カマイ（村を司る神）」と畏敬の念をこめて呼んだシマフクロウが棲める環境づくりをめざす人たちもいる。94年に虹別地区の住民有志で設立した「虹別コロカマイの会」で、精力的な活動を続けている。

「わたしたちの原点はシマフクロウを守ること。それには森と川、魚がなければなりません。木を植えて、本別海までシマフクロウが行き来できるようにしたい。」酪農も漁業も一緒になって西別川を守ろう。って話をしているんですよ」

会長の館定宣さん(56)が力を込める。会員数は49人。うち4割ほどが地元以外の人たちで、共感の輪が広がっている。



西別川の両岸50mに河畔林を再生させる
「魚を育む森づくり事業」(今年6月の植樹祭)

シマフクロウの巣箱かけや虹別の中心部にあった大木200本を西別川沿いに移植する活動を皮切りに、毎年春の植樹などに取り組んできた。

96年からは、シンガソングライター・しらみちよさんの弾き語り「西別川流域コンサート」を開催している。今年も源流から下流まで5会場に合計950人近くが訪れた。口先で環境問題をいうのではなく、弾き語りのなかで理解してもらおうのが目的とか。最終日に1000円の会費で植樹祭をやって、漁協が海の幸を提供してごちそうを出す。流域の交流ムードが高まっている。

コンサートの実行委員会ごとに、西別川の清掃もやっている。
「バイクモは自然のパロメーター。清掃のときに見ると、一時期よりは増えている」といいたくない。

「川と川の付き合い方」をアドバースしていた。が、漁業者や釣り人が見方を変えるだけでは、西別川は甦えられない。基幹産業の酪農のありようが、河川環境と密接につながっているからである。

今、規模拡大と環境劣化の悪循環を断ち切り、風土に根ざした酪農を創ろうとする経営が、根拠地地方のあちこちで育っている。私は、そこに川の再生に向けたヒントがある、と思う。

外国産の輸入飼料に頼らずに放牧を主体にして牛を飼い、生産される糞尿は完熟堆肥にして草地に還元する。こうした適正規模を追求した経営は、牛乳の生産量は減るものの低コストですむ。昔の酪農のようでもあるが、都会のサラリーマンよりずっとゆとりのある暮らしをしている人が多い。環境に対する負荷も少なく、土・牛・人がともに健康になれるので、マイペース酪農、と呼ばれる。

この地方の酪農を、こうしたやり方にならずに転換していく。大規模化したところでも、微生物群を利用した堆肥づくりに努める。川のそばに迫った牧草地には積極的に木を植えて、河畔林を再生させていく。行政は農業関係者の取り組みを積極的に応援する——そんな方向に進んでいけば、河川環境も少しずつ回復していくだろう。

この地方の河川は、酪農関連事業や河川改修工事によって、淡水魚などが棲みにくい環境に変わってきた。環境悪化の原因に目をむけつつ、一人ひとりができることを考えてみてはどうだろうか。



流域の住民が集まって西別川の再生を考えたシンポジウム(94年3月)

で、少しだけ河口から10kmくらいまでバイクモが戻ってきたね」

漁業をしながら支流のシユワンベツ川で20年近くナルドソンの養殖をやっている、副会長の大橋勝彦さん(44)が川の様子を話してくれた。

それぞれトーン車に山になるほどのゴミが集まり、なかには釣りバリのついたイトもあつたとか。フライフィッシングが好きな副会長の高沢俊一さん(43)は、釣り人のマナーについて「家族連れが一番悪くて、ゴミを捨てたりして親が悪い見本を見せている。年配者には乱獲気味の人も多いようだ」と言う。

道東一円をフィールドにした釣りグループ「スプリング・クリーク」は、「虹別コロカマイの会」と連携して植樹や看板の設置などに取り組んでいる。標茶町

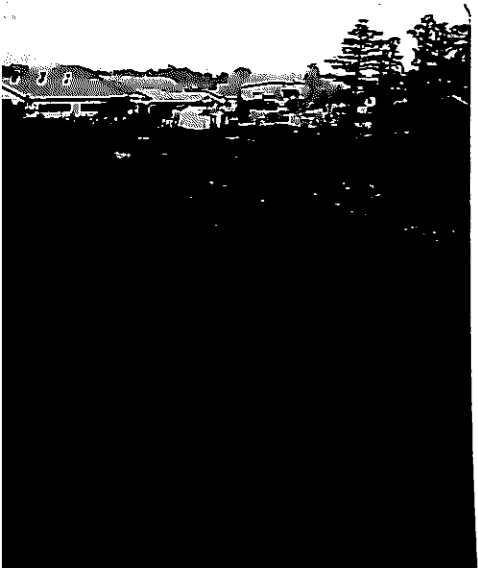
内に住む会員の松本修さん(38)は、「西別川の魅力は川藻が茂って湧水があること。釣り人には憧れの川で、孵化場の下は川に入ると心が洗われる。でも、昔は夕方になるといくらでも釣れたオシヨコマが、ずいぶん減った」と話し、これからは地元の人や漁業者と連携して、地道な活動を通じて西別川をきれいしようとしていた。

保護河川や酪農の 問いなおしを

釧 路町内の灌漑・水道用水として西別川上流の水をバイブラインで引く——という道開発局と同町の計画が5年ほど前に浮上した。結局、流域の住民や漁業・自然保護団体の反発にあつて頓挫するのだが、この取水問題は西別川のありようを見つめなおす好機になった。

その後も、前出のさまざまな試みによって、西別川に清流を甦らそうとする活動の輪は静かに広がっている。それらを実現するためには、どんな道筋を描くといいのだろうか。

保護河川を見直し、上流までサケが遡



川のそばまで牧場が自るところもある